

第3章 食をめぐる現状と課題

1. 泉大津市の状況

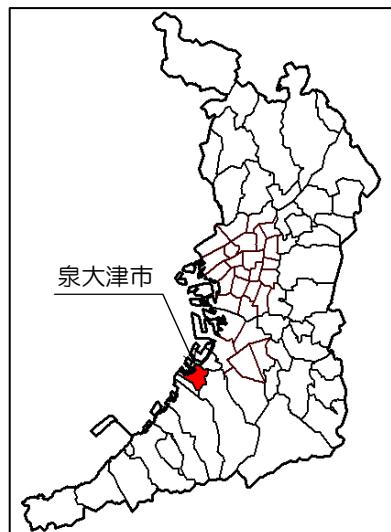
1) 概況

泉大津市は、市制施行当時（昭和 17（1942）年）の市域面積は 8.20km²でしたが、その後臨海部の埋め立てなどにより、平成 21（2009）年 11 月 1 日現在、市域面積は 12.95 km²（うち 3.98 km²は公有水面の埋立地）となっており、東西 5.5km、南北 4.5km にわたる比較的コンパクトな都市です。

市域は、全域がほぼ平坦で、全市市街化区域となっており、工場や農地の減少に伴い、住宅開発などが進み、住工混在の土地利用となっています。

また、阪神高速道路大阪湾岸線や国道 26 号線などの主要幹線道路、南海本線やJR 阪和線が市内を走り、泉大津～九州新門司間を結ぶカーフェリーが就航しているなど、都市基盤や交通の便が充実しています。

さらに、古くから繊維産業が盛んで、特に毛布生産高では、現在でも、国内の9割以上のシェアを誇る「毛布とニットのまち」でもあります。



シンボルマーク

泉大津市のシンボルマークは、「毛布のまち」にふさわしく、羊をデザイン化したもので、目と口にあたる3つの黒い点は、「創造」「躍動」「調和」を表したもののです。また、市の木は「クスノキ」、市の花は「サツキ」です。



市の木「クスノキ」



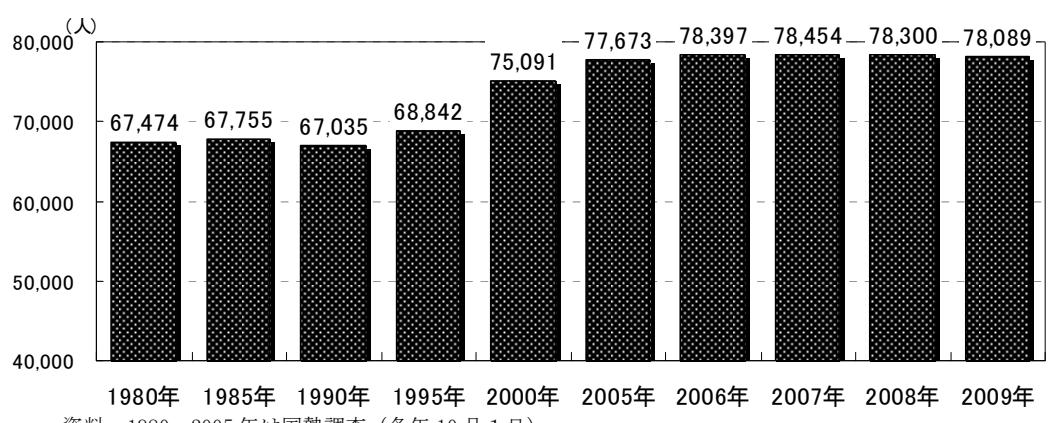
市の花「サツキ」

2) 人口の動向

(1) 人口総数の推移

国勢調査によると、平成7（1995）年以降大きく増加し、平成17（2005）年の泉大津市の人口総数は77,673人となっています。また、住民基本台帳および外国人登録によると、平成18（2006）年から横ばい状態になり、平成21（2009）年の人口総数は78,089人となっています。

【人口総数の推移】

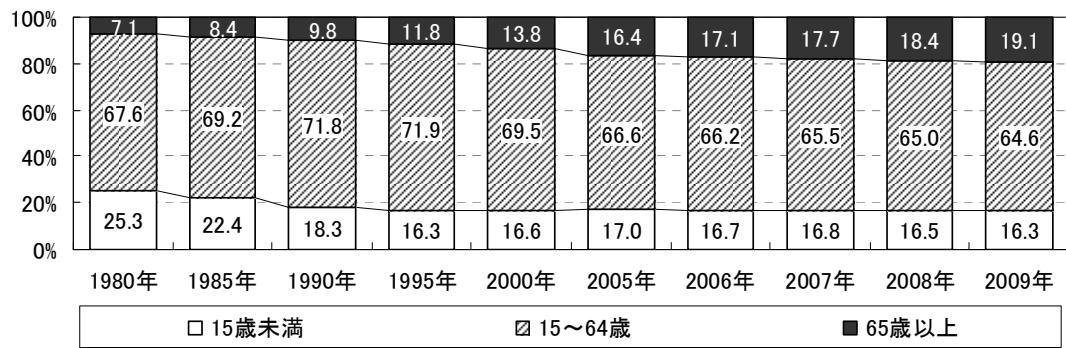


資料：1980～2005年は国勢調査（各年10月1日）
2006～2008年は住民基本台帳および外国人登録（2006～2008年は10月1日、2009年は7月1日）

(2) 年齢3区分別人口構成の推移

国勢調査で年齢3区分別人口構成の推移を見ると、15歳未満の人口割合は平成7（1995）年以降は横ばいとなっていますが、65歳以上の人口割合（高齢化率）は大きく増加し、平成17（2005）年に16.4%となり、住民基本台帳および外国人登録によると平成21（2009）年には19.1%まで増加しています。このことから、泉大津市においても他自治体と同様に高齢化が進行していることがわかります。

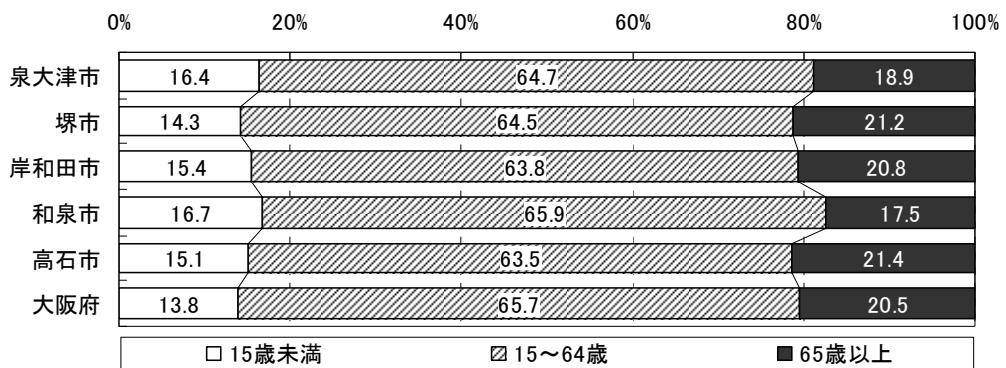
【年齢3区分別人口構成の推移】



資料：1980～2005年は国勢調査（各年10月1日）
2006～2008年は住民基本台帳および外国人登録（2006～2008年は10月1日、2009年は7月1日）

しかし、高齢化が進行しているものの、本市は多くの近隣市や大阪府より、15歳未満の人口割合は比較的高く、65歳以上の人囗割合（高齢化率）は比較的低い状態にあり、次代を担う“子ども”が多い地域とも言えます。

【年齢3区分別人口構成の近隣市・大阪府との比較】



資料：泉大津市は住民基本台帳・外国人登録（2009年4月1日）データ、堺市は住民基本台帳・外国人登録（2009年4月30日）データ、岸和田市は住民基本台帳・外国人登録（2009年4月1日）データ、和泉市：住民基本台帳・外国人登録（2009年3月31日）データ、堺市は住民基本台帳・外国人登録（2009年5月1日）データ、大阪府は2005年国勢調査を基にした2007年の推計人口

泉大津の食の歴史1 ~ 池上曾根遺跡と食 ~

池上曾根遺跡は、泉大津市曾根町と和泉市池上町とにひろがる弥生時代中期の環濠集落遺跡です。その池上曾根遺跡に住んだ弥生人が食べていたものについては、出土遺物から判断できます。

出土する魚の骨は、マダイ、クロダイ、マフグが多く、ヒラメ、スズキ、サメ、ハモ、コイも食べていたことがわかります。また、フグはその調理法が縄文時代には確立していたといわれています。一方、貝では、バイガイ、サザエ、ハマグリ、メガイアワビ、アカニシ、ヘネタリガイ、オオタニシ、カワニナが出土しています。

動物の骨では、イノシシ、ニホンジカ、イヌ、タヌキがあり、大量のタコツボが出土していることから、イイダコ、マダコも食べられていたことがわかります。

植物では、イネのほかにムギ、マクワウリ、ヒヨウタン、アズキ、モモ、ヤマモモ、スマモ、オニグルミ、イチイガシ、トチノキ、クリ、エノキ、サンショウ、ノブドウ、キイチゴの植物遺体が出土しています。

食器としては、土器製のほかに、木製のものも出土しています。

2. アンケート等でみる泉大津市の食を取り巻く現状と課題

1) アンケート等の概要

(1) 食育に関するアンケート調査の概要

【調査の方法】

アンケート対象者		調査方法	調査時期
市民	小中学保護者	小中学校を通じて配布・回収	平成21年7月
	一般市民（15歳以上）	各種団体に依頼して配布・回収	平成21年7月
小学生（小学5年生）		小学校を通じて配布・回収	平成21年7月
中学生（中学2年生）		中学校を通じて配布・回収	平成21年7月
乳幼児保護者		乳幼児健診受診保護者は乳幼児健診案内とともに送付し健診時に回収 保育所保護者は保育所を通じて配布・回収 幼稚園保護者は幼稚園を通じて配布・回収	平成21年7～8月

【回収結果】

アンケート種別		配布数(件)	回収数(件)	回収率(%)	有効回収数(件)	有効回収率(%)
市民	小中学保護者	859	612	71.2	612	71.2
	一般市民（15歳以上）	150	143	95.3	143	95.3
	合計	1009	755	74.8	755	74.8
中学生	小学生（小学5年生）	590	528	89.5	525	89.0
	中学生（中学2年生）	606	568	93.7	556	91.7
	合計	1196	1096	91.6	1081	90.4
乳幼児保護者		786	570	72.5	570	72.5

【回答者属性】

		小中学保護者(%)	一般市民(%)	小学生(%)	中学生(%)	乳幼児保護者(%)
性別	男性	3.9	11.9	49.7	48.0	0.9
	女性	95.4	86.7	49.5	49.8	96.0
	不明・無回答	0.7	1.4	0.8	2.2	3.2
年齢階層	青年期	0.0	0.7	小学5年生	中学2年生	4.9
	壮年期	86.1	14.0			90.0
	中年期	10.9	44.8			1.1
	高年期	0.5	38.5			4.0
	不明・無回答	2.5	2.1			

※青年期は15～24歳、壮年期は25～44歳、中年期は45～64歳、高年期は65歳以上

2) 食育に関するグループインタビューの概要

5~10人程度の参加者を対象に、インタビュアー（司会者）の進行のもと、以下に示す調査目的に沿ってインタビューを行い、必要な情報を収集しました。

参加者	調査目的、収集したい情報	調査時期
婦人会会員	地域における食育の担い手の活動状況や意識、動向等の把握 ・食育に関する活動の具体的な内容・実績	平成21年8月6日
フリー活動栄養士	・活動の対象者、参加者の状況 ・活動する上での問題点や課題	平成21年8月26日
栄養教諭・技師	・行政や他団体・機関に対するニーズ ・今後の方針性、展開への具体的なアイデア	平成21年9月1日
壮・中年期の男性	食育に関するアンケート調査において把握しきれなかった年齢層などを対象に、食に関する意識や動向等の把握 ・食に関する意識	平成21年9月1日
高年期（高齢者）	・食に関する取り組みの状況 など	平成21年9月8日

泉大津の食の歴史2 ~海のくらしと食~

海に面している泉大津市は、数多くの先人が古代から海の幸で生計を立ててきました。「ちぬの海」と呼ばれた大阪湾は、その名に「ちぬ（黒鯛）」がつくとおり魚が豊富に獲れました。

クロダイのほかに、イワシ、ボラ、カニ、タコ、クチ、タチウオ、ハマチ、カレイなどが水揚げされました。漁法としては、地引網が盛んで、助松では「西の赤いのがイワシをとらす」といわれ、夕焼け空であると翌日はイワシが大漁になると伝えられてきました。

また、泉大津市では漁だけではなく、海岸では養殖も行われていました。東港町と菅原町の境を流れる新川周辺の葦原には、「イナモヤシ」と呼ばれる場所がいくつもありました。この「イナモヤシ」とは、「イナ（ボラの幼魚）が発生する」という意味で、新川沿いに溜池をつくり、新川に向けて樋を設置し、満潮に樋を通じて溜池に入った「イナ」を、樋をせき止めて養殖するという、いたって簡単な養殖方法です。この養殖は、江戸時代にはじまり、明治17年頃まで行われていたと、記録に見られます。

さらに、海岸にはイリヤと呼ばれる小屋もあり、そこではカタクチイワシを釜で湯がき、砂浜に敷いたムシロの上で天日干しにしてニボシをつくっていました。泉州のニボシは有名でよく売れたそうです。

今は埋め立てられていますが、かつての泉大津の海辺は豊かでした。

2) 食を取り巻く現状

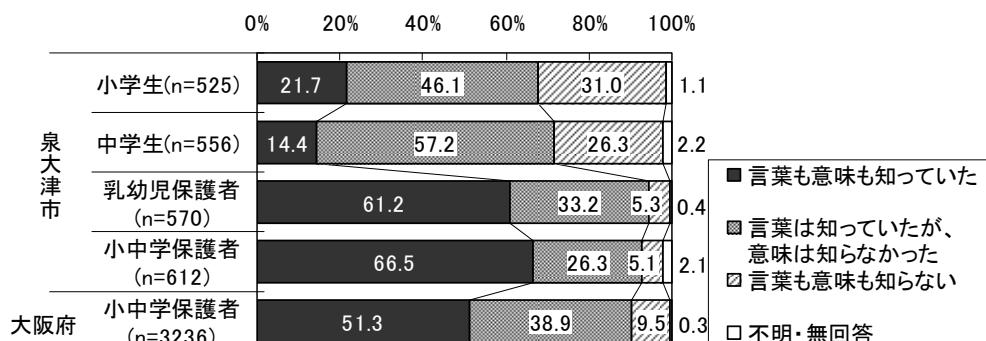
前述の食育に関するアンケートやグループインタビューの結果より、本市の食を取り巻く現状等を整理します。

A 「食育」の認知度は高いものの、関心は薄く、実践等の取り組みにつながっていない

アンケート調査結果より

- 食育の認知度（言葉も意味も知っている人の割合）は、保護者や一般市民ともに6～7割となっており、大阪府データ（平成18年）を上回っています。
しかし、小中学生では、「言葉は知っているが、意味は知らない」人が半数程度を占めており、大人より認知されていません。

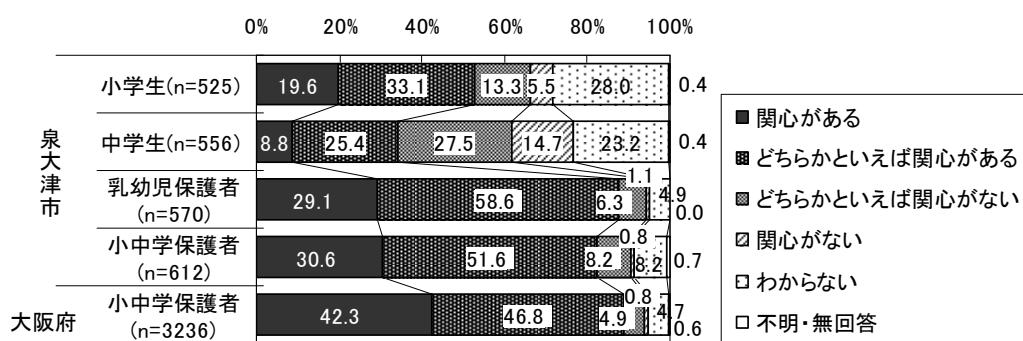
【食育の認知状況 小中学生・保護者】



大阪府データ：「『食育』に関するアンケート（平成18年）」（大阪府）

- 食育に关心がある人（関心が強い人）は、保護者で3割程度、一般市民では4割程度となっており、大阪府データ（平成18年）を下回っています。

【食育の関心度 小中学生・保護者】



大阪府データ：「『食育』に関するアンケート（平成18年）」（大阪府）

- 食育に関する活動や行動について、積極的にしている保護者の割合は大阪府データ（平成18年）を下回っており、その理由としては、関心はあるものの「忙しい」「食費を安くすることが重要」といったものが上位を占めています。
- 同様に、食事バランスガイド※についても、保護者では認知度は高いものの、積極的に食事バランスガイドを参考にしている人は少なくなっています。
- 身近な食育に関する集まり（サークル）などへの参加率（現在参加している人の割合）は、大阪府データ（平成18年）の半分に達しておらず、参加者が少ないとわかります。

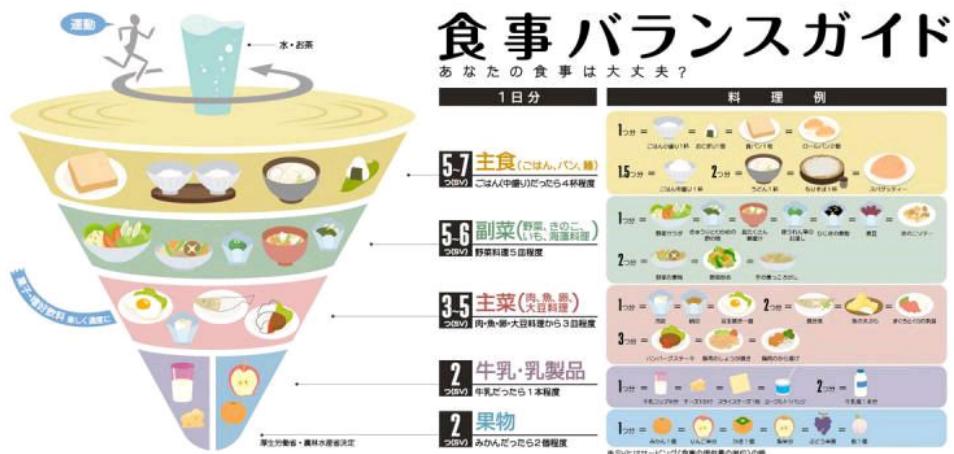
グループインタビュー結果より

- フリー活動栄養士からは、他の活動地域と比較して、市民の食育への関心が薄く、食育に関する取り組みも活発ではない印象があるという意見が出されています。また、新たな担い手がない、育成が大変との意見も出されています。
- 壮・中年期の男性では、「食育」については「子どもへの教育・指導」というイメージを持つ人が多くなっています。
- 婦人会会員からは、親世代への指導・教育が重要との声が多く出されています。

ご存知ですか？～食事バランスガイドってなに？～

1日に「何」を「どれだけ」食べればよいのか、そのおよその量が一目でわかるようにつくられています。

主食、副菜、主菜、牛乳・乳製品、果物の5つのグループの料理・食品を組み合わせてバランスよくとれるよう、コマに例えて、それぞれの適量を下図のようなイラストでわかりやすく示しています。



食事バランスガイドの詳細については、農林水産省の下記ホームページをご覧下さい。

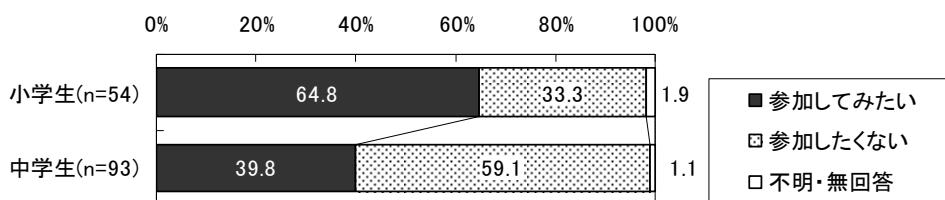
http://www.maff.go.jp/j/balance_guide/index.html

B 農業体験に対するニーズは子ども・大人ともに高い

アンケート調査結果より

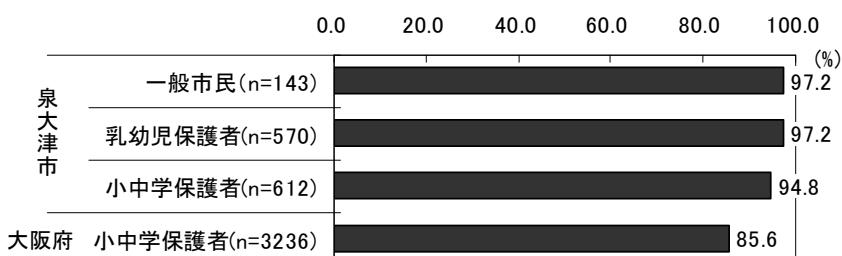
- 小中学生については、保護者より子どもの方が、田植えや野菜の種まき、苗植え、草抜きや水やり、稻刈りや芋ほり、野菜の収穫などの農業体験の経験割合が高くなっています。（小中学生は9割前後、保護者は7割）
- 乳幼児や小学生では、農業体験を通じて好き嫌いが解消されたケースが5割程度を占めていますが、中学生では4割程度となっています。
- 農業体験未経験者の今後の参加意向については、小学生で6割強、中学生では4割となっており、小学生の参加意向が強いことがわかります。

【農業体験未経験者の今後の参加意向 小中学生】



- 子どもの食育推進にあたって、農業体験が必要と考える人は、保護者や一般市民とともに9割を超えており、大阪府データ（平成18年）を上回っています。また、今後子どもに農業体験させたいと考える乳幼児保護者も9割を超えており、農業体験へのニーズが非常に高いことがわかります。

【子どもの食育推進での農業体験の必要性について 一般市民・保護者】



大阪府データ：「『食育』に関するアンケート（平成18年）」（大阪府）

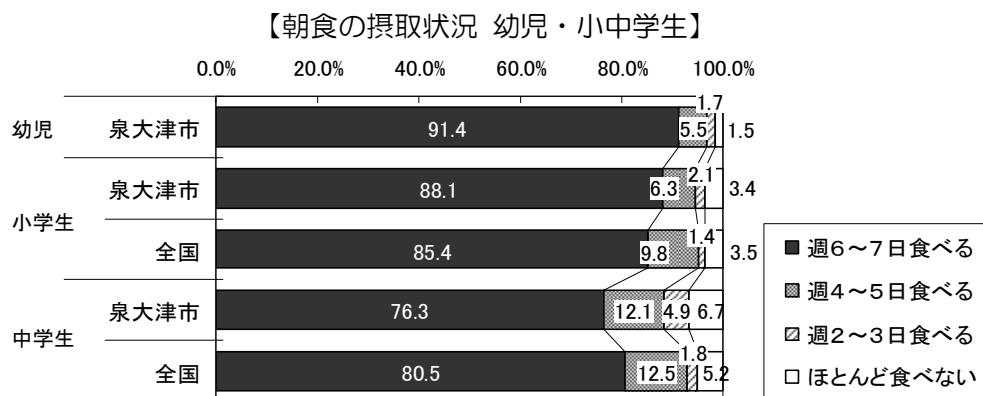
グループインタビュー結果より

- 婦人会会員や壮・中年期の男性からは、子どもにとって体験活動は非常に重要であるとの意見が多く出ています。しかし、一方では、「周辺に田畠が無く、子どもに農業体験をさせる機会・場が少ない」という意見も出ています。

C 朝食欠食や孤食、就寝時間の遅延化など子どもの生活リズムが乱れている

アンケート調査結果より

■朝食の欠食率（朝食をほとんど食べない人の割合）については、幼児で 1.5%、小学生で 3.4%、中学生では 6.7%と年齢とともに増加傾向にあります。特に、中学生の欠食率は全国データ（平成 17 年）の 5.2%を上回っています。



全国データ：「児童生徒の食生活等実態調査（平成 17 年）」（独立行政法人日本スポーツ振興センター）

注）幼児データについては、乳幼児保護者アンケート（平成 21 年）の子どもの年齢 1～6 歳のデータ

- 幼児や小中学生については、就寝時間が遅くなるに従って、欠食率が大きく増加しており、生活リズムの乱れが朝食の欠食を招いていることがうかがえます。
- 小中学生の就寝時間については、全国データ（平成 17 年）と比較しても、遅くなっています。特に中学生でその傾向が強く表れています。
- 小中学生の朝食の欠食理由については、「食べる時間がない」「食欲がない」など就寝時間が遅いことが原因と考えられる事項が上位を占めていますが、その一方で、「朝食が用意されていない」「朝食を食べる習慣がない」といった保護者に関連する理由も少ないとされています。
- 小中学生の食事の状況（だれと食べるか）についてみると、小学生では朝食の孤食率（一人で食べる人の割合）が、中学生では夕食の孤食率が全国データ（平成 17 年）を上回っています。

グループインタビュー結果より

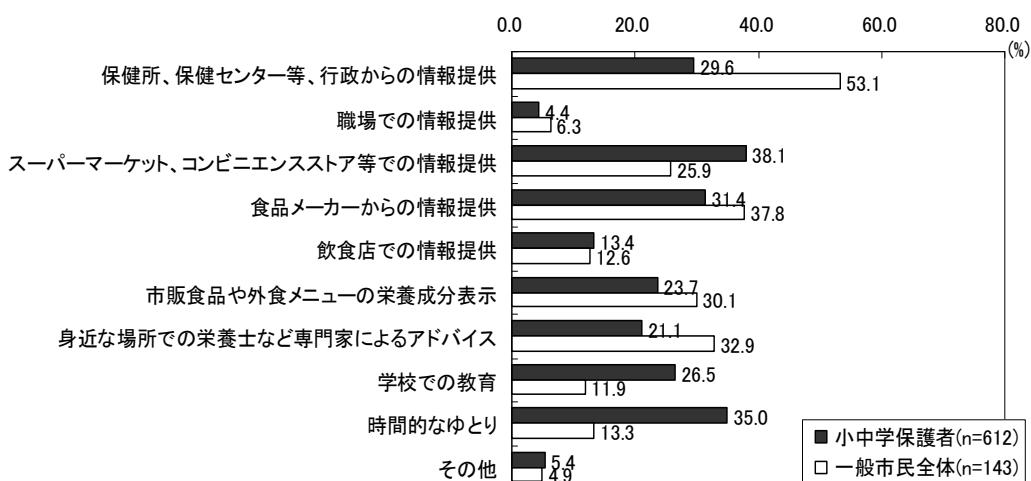
- 高年期の方からは、子どもが親の生活時間の影響を受けて、生活リズムが乱れていくのではという意見が出ており、婦人会会員からも、ライフスタイルが大きく変化するなかで、子どもの生活にも歪みが出てきているとの声もあります。
- 栄養教諭・技師からは、学校において、朝食を食べることについての取り組みや肥満傾向児への指導などの取り組みを進めているといった意見が出ています。

**D 身近な地域での食育活動や担い手に関する情報が浸透していない
マスメディア*から食に関する情報を入手する人が多く、
情報入手先や情報提供に対するニーズは多様化している**

アンケート調査結果より

- 身近な食育に関するサークルが「ある」とした人は、乳幼児保護者で2割、小中学生では1割となっています。しかし、「わからない」とした人はそれぞれ7割程度となっており、食育に関心がある人でも6割程度となっていることから、身近な食育サークル等に関する情報がしっかりと把握ができていない状況がうかがえます。
- 食や栄養に関する情報の入手先としては、保護者や一般市民ともに「テレビ・ラジオ」や「本・雑誌」などのいわゆるマスメディアや「友人・知人」などが上位を占めています。また、保護者や壮年期では「スーパー・食料品店」や「保育所、幼稚園、学校」、中・高年期では「医療機関、保健所・保健センター」が多くなっており、ライフステージ*毎で情報の入手先が変化しています。
- 食習慣改善のための必要条件については、行政からの情報提供やスーパーマーケット、コンビニエンスストア等や食品メーカー等の情報提供等が上位を占めています。

【食習慣改善のための必要条件 保護者・一般市民】



グループインタビュー結果より

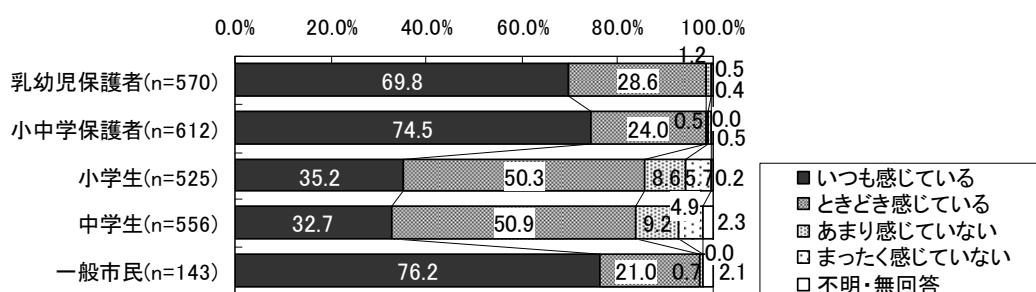
- フリー活動栄養士からは、子どもの料理教室や高齢男性の料理教室などの食育活動がクチコミで広がり、大きな成果を挙げているという他地域の事例の紹介がありました。
- フリー活動栄養士からは、食の専門家として人材登録をしているが、活動要請は来ないとの意見がありました。一方、婦人会会員からは、勉強会の開催など専門家に対するニーズがあり、行政にコーディネートしてほしいとの意見が出ています。

E 子どもは、食べ残し等に対する意識が低く、積極的な行動につながっていない

アンケート調査結果より

■食べ残しや食品廃棄について、いつも「もったない」と感じる人の割合をみると、保護者や一般市民ともに7割程度（高年期では8割を超える）となっていますが、小中学生は3割台に留まっており、大人と子どもの間にギャップが生じていることがわかります。

【食べ残しや食品の廃棄を「もったいない」と感じる頻度 保護者・小中学生・一般市民】



■食べ残しを減らす努力の状況について、いつも努力している人の割合をみると、保護者や一般市民ともに6～7割程度となっていますが、小中学生は3～4割台に留まっており、大人と子どもの間にギャップが生じていることがわかります。

F 郷土料理の認知度は保護者、子どもとともに低い

高年期では郷土料理の認知度や継承活動への参加意向が比較的高い

アンケート調査結果より

■泉大津（泉州地域）の郷土料理の認知度（知っている人の割合）は、保護者が2割程度、小中学生では1割程度に留まっています。一方、高年期は34.5%と他と比べて認知度が高くなっています。

■食育推進に関するボランティア活動への参加意向については、高年期で「郷土料理等の食文化継承活動」に参加したい人が4割に達しており、多くなっています。

グループインタビュー結果より

■婦人会会員からは、煮物など日本食を食べられない子どもが多くなっているという意見がありました。また、料理教室などを開催しても、若い母親の参加がないとの意見もありました。

ご存知ですか？～お茶碗1杯のごはん～

例えば、お茶わん1杯の米粒を数えると3,250粒ぐらいになります。

1つの稲穂にモミが70粒ぐらいあるので、お茶わん1杯分のお米を収穫するには、稲穂を46本刈りとらなければなりません。

また、精米1粒の重さは0.02g程度なので、日本人口約1億3千人が、お茶わんに1粒のお米を残すと、合計で2,600kgにもなってしまいます。

ちなみに、1人当たりのお米の年間消費量は59.0kg(農林水産省 平成20年度食料需給表)なので、この2,600kgは44人が1年間で消費するお米に匹敵します。

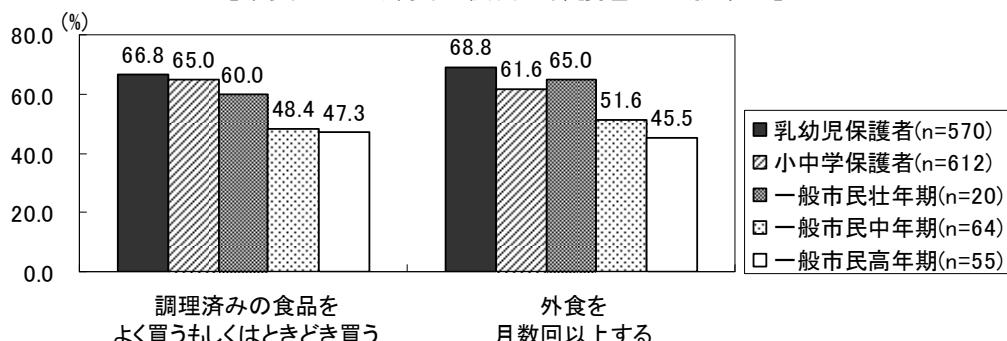


**G 中食*や外食の頻度は保護者世代で多くなっているものの、
栄養成分表示*を参考にしている保護者はあまり多くない
スーパー・マーケットや飲食店などが食の情報入手先となっている
こともあり、情報提供の場としてのニーズも高い**

アンケート調査結果より

- お弁当や惣菜などの調理済み食品の購入頻度については、よく買うもしくはときどき買う人が、保護者や壮年期で6割となっており、中・高年期（5割程度）より多くなっています。
- 外食の頻度については、月数回以上人が保護者や壮年期で6割台となっており、中・高年期（4～5割）より多くなっています。

【中食および外食の状況 保護者・一般市民】



- 外食時の栄養成分表示の参考状況について、参考にしている人は、外食の頻度が高い保護者で4割程度となっており、外食の頻度が低い一般市民（壮・中・高年期）より少なくなっています。
- 「うちのお店も健康づくり応援団*」のマークについて、見たことがある人は乳幼児保護者で14.6%、小中学生保護者で18.0%と、大阪府データ（平成18年）と大きな差はありません。
- 食や栄養に関する情報の入手先として、保護者や壮年期では、「スーパー・食料品店」が他のライフステージより多くなっています。
- 食習慣改善のための必要条件では、スーパー・マーケット、コンビニエンスストア等や食品メーカー等の情報提供などが上位を占めています。また、壮年期では他のライフステージと比べて、飲食店等での情報提供を求める声が多くなっています。

グループインタビュー結果より

- 壮・中年期の男性からは、「週末は家族で外食が多い」「外食先は子どもの好みで決まる」等の意見が出ています。